

半世紀超え「フジタのあるまち」伝える

フジタが毎年発行する卓上カレンダーの原画作家としても知られる画家澤田正太郎の記念館が東京都北区田端の閑静な住宅地に誕生した。日本各地を旅して日常の風景を繊細な筆致で描いた、まさに「まちを愛した画家」の珠玉の作品を間近に鑑賞できる貴重な場となる。



2023年版カレンダー
『フジタのあるまち』



澤田正太郎は、新国劇を創設した名優澤田正三郎と、女優で新国劇立ち上げメンバーだった渡瀬淳子の長男として、1916（大正5）年、現在の墨田区向島に生まれた。37（昭和12）年に東京美術学校（現東京芸術大学）油絵科に入学。卒業後は、一陽会などを活躍の場に、96年に79歳で亡くなるまで作家活動一筋の人生を費した。

初期に多いサカス小屋や遊園地の絵は、興行が終わった後のさみしさを押し込めるような情感にあふれ、好んで描いた工事現場の絵からは、養生シートの風を受けてはためく音が聞こえてくるようなリアルティーを感じさせる。

港町の風景も好きで、特に横浜には田端から定期券を買って足しげく通ったという。屋根の連なりを俯瞰するような町並みを多く描いた一方で、橋などは下から見上げるように丹念に構造を表現。トタンや下見板張りの壁面、電線なども細密に描写した。

その風景画に人物はいないが、背景としての無数の家並みも一つとしておろそかにすることなく、人々の生活の場として描き込まれており、作品の多

人の営みへの温かなまなざし

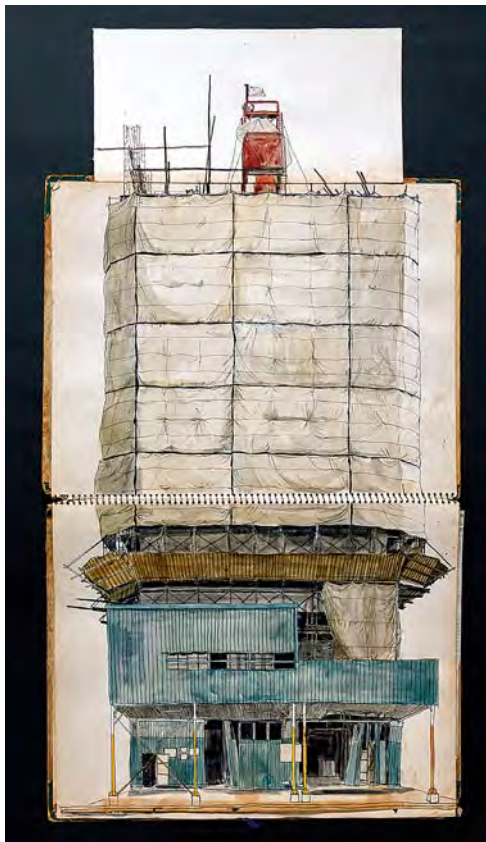
くが描かれた「昭和」の時代の息吹とともに、かつて確かに存在した暮らしや営みへのいとおしさにも似た郷愁に誘われる。

温かなまなざしで描かれたまちのたたずまいが琴線に触れたのであろう、藤田組（現フジタ）の藤田一暁社長（当時）は、1965年に高島屋で開かれた澤田の個展を偶然訪れて心を打たれ、まちづくりに携わる建設会社として、毎年発行している卓上カレンダーにぜひと依頼。1年かけて根気よく説得したという。

68年に始まる澤田の原画によるカレンダーは、当初藤田組が建設した施設の絵で構成したが、その後、75年版から『フジタのあるまち』シリーズがスタート。同社と関わりのあるまちを日



澤田滋野さん（左）と安細菊乃さん



1960年頃に描いた工事現場の絵。スケッチブックを縦に開き、さらに紙を付け足している（撮影・今田潤）



澤田正二郎と渡瀬淳子の展示スペースも

本全土に訪ね歩いて描いた四季折々の風景画は大きな話題を呼び、各地に根強いファンを生んだ。このカレンダーは澤田の死後も続き、2023年版で55回を数えた。企業のカレンダーを半世紀を超えて1人の画家の絵で飾り続ける世界でも希有な事例といえる。

田端の高台に19日開館した記念館は、澤田の長女である安細菊乃さんと澤田滋野さんの姉妹が父のアトリエを兼ねた居宅を改装。各方面の専門領域を持つ友人・知人たちの協力も得て、手作りで準備を進めてきた。100号の大作を含め、油絵や水彩画、エッチングなど40点を超える作品を展示している。澤田正二郎と渡瀬淳子を紹介するコーナーも設置。多才でいて人間味あふれる2人の実相を垣間見ることができる貴重な資料が並ぶ。

館長の澤田滋野さんは「世に知られた作家ではないかもしれないが、生涯をかけて良い絵を描き続けた。少しでも多くの人に見てもらい、改めて画家澤田正太郎という人間を考えていきたい」と話している。

開館は金・土・日曜の週3日。時間は午後1時から6時まで。入館料は300円（中学生以下無料）。所在地は東京都北区田端6-4-18。詳細はホームページ（<http://www.sawadakin-en.com>）